平等の時代のヒエラルキー

タルド『模倣の法則』における「デモクラシー社会」論

赤羽 悠

はじめに

近代デモクラシーにおいて中心的な原則の一つは、間違いなく平等である。それがいかに適用されるべきかについて無数の議論が存在するにしても、その原則自体が直接的に否定されるとは稀である。しかしながら、その概念自体に全く議論の余地がないというわけではない。ルイ・デュモンは、近代デモクラシーに固有の平等の原則と社会一般の原則の間には常に緊張があるという点を指摘している。「我々の社会は例外的であって、平等の理想の実現はといえば、困難を伴うものなのである」。そして、ここで社会の原理として提示されるのが、まさに平等の対極にあるように思われるヒエラルキーであった。近代デモクラシーが常にヒエラルキーの排除を要請するのに対して、社会は常にヒエラルキー的に構造化されている。ここでデュモンが問い直しているのは、デモクラシーの原理と社会の原理との関係およびそれらの分節化であり、換言すれば、それらを結びつけることによってのみ成り立つはずの、「デモクラシー - 社会」の可能性そのものであると言えよう。ただし、この問題は、デュモンが初めて定式化したものなので、それは、デモクラシーが一種の社会状態として捉えられるようになり、実際に「デモクラシー社会（société démocratique）」の到来が一つの現実として認められるようになっ

た19世紀フランスにおいてすでに浮上していたものなのである。その点を踏まえるならば、19世紀の思想家・社会学者ガブリエル・タルド（1843-1904）が、社会の原理としてのヒエラルキーについて語っているという事実は注目に値する。たしかに、「ヒエラルキー」という表現はその著作に顕出のものではなく、タルド研究の中でもそれが注目されるとは稀である。しかしながら以下で見るように、このヒエラルキーの指摘は、タルドが、デュモン同様にデモクラシーの原理と社会の原理との必ずしも調和的でない関係に着目してい

る、ということを示すものであった。実際のところ、この非調和的な関係の問題は、19世紀のフランス社会における社会的なものへの関心の高まりとともに必然的に浮上するものであって、
その点を考慮するならば、それは思想史的な面からも重要であると言えよう。

本論ではこうした観点から、主に『権威の法則』に見出されるヒエラルキー概念に注目し、19世紀フランスで浮かび上がってくることになった「デモクラシー社会」の概念をタルドがどのように捉え直していたのか、という問いに答える足がかりとした。最初に、タルドの「権威」によるヒエラルキーの概念が、近代的平等およびそれが依拠している個人主義的観点をいかなる意味で問い直すものであったのかを明らかにする。その上で、このヒエラルキーという社会の原理が、それと対極にある平等を原則とする社会において、どのような形で見出されるのかを探る。そして最後に、セレスタン・ブレのタルド解釈にも検討を加えつつ、タルドがヒエラルキーの概念によって捉えていたのは、「デモクラシー社会」における特殊な優越性の生
成、すなわち社会的権力の存在であるという点を示したい。

1. 近代における平等の原理とその外部

タルドにおけるヒエラルキーの概念は、どのような観点から「デモクラシー社会」を問い直すものであったのか。ヒエラルキーという概念によって問い直されるものとは、言うまでもなく平等の概念である。だが、そもそも近代を特徴づける平等とは正確にはどのような概念なのであろうか。それは現実の平等というよりも、むしろある特殊な社会的現象の表象である5。ルイ・デュモンの分析を参照するならば、この平等の原理に特徴的のは、それが個人主義と結びついているという点である。デュモンはこの「個人主義」を「全体論（holisme）」に対置する。全体論の社会とは、一つの全体として捉えられた社会、すなわち「集合の人間（Homme collectif）」に重点が置かれた社会である。それに対して個人主義社会は、このような「全体」の不在とし
て定義される。そこに現れてくるのは「合理的存在、諸制度の規範的主体」という意味での「個人」であり、逆に「社会」は存在論的にはないもの、もはや個人のための手段にすぎないものとなる6。そしてそのような「個人」は、社会から切り離され独立したものであると同時に、それぞれが人類全体を体現したモナードであるとみなされる。自由の価値と並んで平等の価値が導き出されるのは、このような「個人」の概念からである。なぜなら、「もし人類全体が各々の人
間に見われるとみなされるならば、各々の人間は自由であって、すべての人間は平等7であることになるからである。各々の人間は、一つの全体を構成するある部分ではなく、同質なものとして互いに並置される存在となる。そして、その状態を示すのが自由と平等であった。
しかしながら、このような平等は、抽象的な理念の次元を離れてより具体的な社会関係の問題を考えた時に、近代個人主義の観念に内在的ある問題を浮かび上がらせることになる。この問題について明確な形で触れていたのはトクヴィルであった。トクヴィルは、「諸条件の平等（égalité des conditions）」に基づくアメリカ社会の分析を進める中で、この社会において浮かび上がるのは、平等そのものの到来であるよりもむしろ不平等であるというを見出した。

デモクラシー的な国民において、人々はある一定の平等を容易に得ることができる。しかし、彼らが欲する平等に到達することはできないであろう。それは日々人々の前から後退していくが、その視界から消えることはない。それは、たえず進きながら人々をその追求へと駆り立てるのである。

二人もしくはそれ以上の人間が出会った時、彼らがある側面において平等であったとしても、そこで際立つのは現実に存在する平等ではなく、いまだに残っている不平等の側面である。そしてこの不平等は、二人の個人のあいだには必ず差異あるいは隔たりがあるという事実ゆえに、あるいは出会うのは必ず二人の異なる個人であるという単純な事実ゆえに消滅することはない。ここで示された平等の不可能性は、モナド的個人の平等という概念の孕む一種のパラドックスを示している。平等の概念は一方で、各々の個人が互いに切り離され横並びとなった状態を表す。デュモンが示すように、それは近代社会におけるモナド的個人の状態を表すものである。しかし他方で、それは人間相互の関係が問題になるときにしか意味をなさない。というのも、平等は定義上、それぞれの個人を対峙させ比較する場合にのみ測られるものだからである。すなわち平等とは、人間相互の関係あるいは社会形態を決定する概念でありながら、社会そのものを解体しようとするのであり、いわば無関係という関係を表すものなのである。そこに表れているのは、いわばルソー的な自然状態を社会のただ中に持ち込むという個人主義的理想的な孕む矛盾であった。

たしかに近代とは、旧来の封建的諸制度が解体し、トクヴィルの言う「諸条件の平等」、すなわち社会的流動性が一定程度実現された時代であると言えるかもしれない。しかし、そこで人間相互の諸関係を実際に規定している原理は必ずしも平等ではない。モナド的な個人の平等と
いう概念には、そのような社会の原理は内包されていないのである。結局、近代デモクラシー社会の根拠には平等という概念によっては表されないようなある力学が働いていることになる。平等の原則の外れを見ることの必要性が現われてくるのはここにおいてである。そのような外延について考えるということは、それゆえ、「デモクラシー社会」の底流にある力学に目を向け、いうことである。もし平等がそれ自体によって人間関係を説明しえないのであれば、それを説明するためにある別の語彙が必要となるであろう。平等を原則とする社会を定義するには、平等と関連付けられつつも人間の関係性を定義しうる、この平等の外部を指す概念が必要となるのである。

タルドの著作で言及される模倣によるヒエラルキーとは、まさにそのような平等の外部を表す概念であった。トクヴィルが、モナド的個人の観念の限界を示すことで平等の外部に否定的に触れていたとすれば、タルドは、模倣によるヒエラルキーの概念によってそれをより積極的に定義しようとすると。

社会が模倣によって織りなされている、とタルドが言うとき、「模倣」とは様々な行為の中の単なる一つの行為なのであろう。それは社会に生きる人間を定義づけるような根本的事実である。「社会的な存在は、まさに社会的なものとして、本質的に模倣者である」。だが、「模倣」とは一体何か。それは「ある精神から別の精神への、距離を隔てた作用、ある脳のネガが別の脳の感覚銀板によって複写されるというほとんど写真のような作用」として定義される。それは、何より「精神間の（inter-spirituel）」作用を指すものであり、ある一定の念（croyance）および「欲望（désir）」から構成された観念や願望、判断や意図が他者へと伝わり、影響を及ぼすことである。それゆえ、模倣とは単なる行為の一つなのではなく、人間を主体として構成するような根本的な社会的作用なのである。すなわちそれは、個人の存在に対して二次的なものではなく、その存在そのものを規定するような存在論的な概念として提示されている。タルドにとって、人間はまずそのような意味での「模倣者」である。もちろん、模倣は必ずある発明あるいは発見の模倣であるから、その模倣の流れの出発点・発明者の存在は不可欠である。そして具体的な個人、あるいは個人の集まりであるところのこの発明者は、発明および発見の瞬間において、「一時的にそれが属する社会から逃れねばならない」。しかしながら、このことは、模倣者と発明者が存在することを意味するものではない。いうのもの、発明はあくまで様々な模倣の流れの既中部に現れるものであり、発明者とは模倣から
新たなものを生み出す存在だからである。発明は外部と全く切り離された個人から生じるわけではなく、あくまで模倣者が、しばしば偶然によって発明者となるのである。それゆえ発明という側面を考慮しても、模倣という事実は全般的なものである。そしてそれは、モナド的な個人の概念を回収されない人間の社会的性質を示しているのである。

タルドは、このような社会の基本的事実としての模倣の作用のうちに、ヒエラルキーを見出している。模倣の作用においては、常に模倣者と被模倣者とのあいだに隔たり、あるいは落差がある。模倣作用の連なりはいわば川の流れのようなものであって、常に一定の方向を持つ。この一方向性が模倣の作用の本質であるが、そこから一種の非対称な関係、そして社会的な高下差が生じることになるのである。

発明は、最も下層の民衆からも生まれることがありうる。しかし、それが広まるためには、際立った社会的な頂点が、すなわち連なった模倣の滝がそこに流れ落ちるような一種の社会的給水塔（château d’eau social）がなくてはならない。

社会的な高低差は、この模倣という社会的事実そのものに関わっている。それは、川の流れに比しうるような模倣そのものの性質である。ゆえに、模倣によって社会を定義するタルドにとっては、ヒエラルキーはあらゆる社会にとっての必然であって、「デモクラシー社会」においても見出されるものである。

あらゆるデモクラシー社会において、[...] 世襲あるいは選択という形で認められた優越性による、旧来のものあるいは新興の社会的ヒエラルキー（hiérarchie sociale）が存在するということをわれわれは確信することができるであろう。

タルドはこのように、「デモクラシー社会」においてもその根底に見出されるはずの社会の原理を模倣のヒエラルキーとして捉えることになる。模倣によるこのヒエラルキーは、それゆえ、まさに平等の原理の外部を指し示すものであり、そのようなものとして、近代のモナド的個人の概念を問い付すものなのである。
2. 「社会的な社会」としての「デモクラシー社会」

以上の点を踏まえた上で重要なのは、タルドにおけるヒエラルキー概念が、平等の原理に対して社会の原理としてのヒエラルキーの普遍性・優越性を説くという単に反動的な思想を示すものではないということである。タルドの思想に見られるのは反デモクラシー的な社会像ではなく、デモクラシーの原理とヒエラルキーの原理との独特な関係・分節化である。というのもタルドは、デモクラシーならち平等の時代の到来を、模倣による類似化という形でたしかに捉えているからである。タルドの思想に見出すべきのは、この類似化の現象とヒエラルキーの原理との結びつきであり、換言すれば、まさに平等の時代のヒエラルキーとは何かという問題である。

物理における波動、生物学における遺伝に対応する一種の反復であるところの模倣は類似化を生む。この類似化の過程は、模倣作用が広まるにつれて一層加速される。人々の類似性と模倣の間には、いわば相互作用がある。模倣の作用によって生み出された類似性が、今度は新たな模倣作用を生み出す。例えば、カースト、階級、民族のあいだの壁の消滅は、それ自体、模倣による類似化作用の結果であるが、同時に新たな模倣の条件となる。また、輸送手段の発達による人間相互の社会的距離の縮小もまた、様々な技術的発明の模倣・蓄積の成果であるともに、さらなる模倣の活発化を準備するものである21。こうして模倣と類似化は、互いが互いを可能にしながら、「無限の発展」22を続けていく。このような観点からすれば、様々な模倣の作用によって織りなされる歴史は、ヒエラルキーの制度を備えた旧来のアリストクラシーの残存を示すどころか、われわれが押しとどめることのできないデモクラシー化の過程として捉えられるものである。それゆえ、タルドにとって「世界的でデモクラシー的な類似化への傾向は、歴史の不可避な性向」23である。ここに、トクヴィルが「神の持理的事実（fait providentiel）」24と呼んだ、「諸条件の平等」の発展と同じものを見るのは容易であろう25。タルドは、トクヴィルが見出した現象を、改めて模倣の概念によって定式化しているのである。

しかも、タルドは単に平等の時代の到来を無視していないだけではない。彼は文明の発展した近代社会を、はっきりと脱ヒエラルキー化された社会として捉えている。『模倣の法則』と対になる著作である『社会論理』において、「ヒエラルキー」の語は、模倣に内在的な原理を表すものであるどころか、デモクラシー以前の社会を説明するものとなっている。タルドは、文明の進歩が、ヒエラルキー的組織をもった有機的社会からより類似化された部分からなる脳的社
会への変化をもたらすと主張するが、ヒエラルキーが存在するのは有機的社会の方である。蜂や蟻の様々な動物において典型的に見られるとされる有機的社会では、「個体は本能によって自らを公的な利益に捧げるように突き動かされ」、「ある器官もしくはある細胞」の役割を果たすことになるのであり、「諸機能のヒエラルキー的従属（subordination hiérarchique）は、そこでは完全なものとなっている」という。こうした社会は、人間の場合でも、奴隷が存在するような古代社会において見られるが、しかし、それはまだ文明が進歩していないからである。文明化が進行するにつれて、社会は「脱組織化」していくのであり、それは「一種の高等な心理学的メカニズム」を持つものとなっていく。そのような脳的社会を特徴づけるのは、そこでして社会を構成する要素が同質のものになるという点である。さまざまな器官からなる有機体と異なり、脳は、たとえそれが多様な機能に分割されているとしても、比較的類似した要素からなっているとタルドは言う。その要素間のコミュニケーションの素早さや容易さを生み出しているのも、こうした同質性である。こうして、近代社会は、それを有機体として捉える論者が考えるように差異化とその組織化によって特徴づけられるのではなく、反対に、類似化と脱組織化によって特徴づけられるものとなる。こうした観点は、デュモン的に言えば全体論的社会から個人主義社会への移行を説明するものである。個人は、社会という一つの全体によって規定され、それに奉仕する存在ではなくなり、ある自己を保つ存在となる。脳的な社会では「個人の利己主義が発展し、あらゆるものの移ろいやすい一体性（cohérence）が維持されるのは、犠牲の精神、とりわけ無意識の犠牲の精神によるものではまずますなくなっていく、[...] 共感的な利己主義の均衡あるいは連帯によるものますます（完全にとは決してならないのが）なるのである」。こうしてタルドは、近代における文明の発展を、有機体的なか社会における「ヒエラルキー的従属」からの個人の解放と、社会を構成する個人の同質化に見ている。ヒエラルキーはこの場合、前近代的な社会を定義するものであり、社会のデモクラシー化に伴って縮小していくものである。

こうした点を踏まえるならば、「デモクラシー社会」においても見いだされるヒエラルキーとは、アリストクラシー的制度を構成していたヒエラルキーとは別種のものであることになる。タルドは、アリストクラシー社会を特徴付けるヒエラルキー的秩序が崩壊した「デモクラシー社会」において、まさに存在することになるヒエラルキーを問題にしていると言えるのである。それではタルドにとって、このヒエラルキーを特徴づけるものとは何なのであろうか。
ここで重要なのは、タルドが、アリストクラシー社会から「デモクラシー社会」への不平等の質的変化について指摘している点である。「デモクラシー社会」への移行は人々の類似化と人々の間の壁の縮小という量的変化として捉えられていたが、その移行が意味するのはそのことだけではない。そこには不平等の質的変化も見られる。

上から下へという模倣の進展はたえず適用されている。だが、それが前提とする不平等は意味を変えた。本性上有機的なアリストクラシー的不平等に変えて、全く社会的な起源をもった（d'origine toute sociale）デモクラシー的不平等が現われたのである。それは、その方がよければ平等と呼ぶことのできるものであるが、結局のところ、常に非人格的な権威（prestiges）、ある個人から別の個人へ、またある職業から別の職業へと働くが、その方向は交互に入れ替わるような権威による、いわば相互作用である。30

改めて論じる点であるが、模倣の作用は常に社会の上層から下層へと進むという法則を、タルドはここで踏まえている。デモクラシーの到来によって、不平等は消減するのではなく、「意味を変える」のである。ここで注目すべきなのは、「社会的」という形容詞のもつ意味である。タルドは、この語をアリストクラシー社会を示す「有機的」および「世襲的」31という語に対置させ、それをはっきりとデモクラシーに結びつけている。これは説明を要する点である。というのも、通常の意味においてはアリストクラシー社会もまた社会なのであり、そこに存する不平等はやはり「社会的」とみなしょうからである。「社会的」という語は、ここでは完全にタルド的な意味での「社会」を踏まえたものとして、すなわち、模倣的であるという意味において理解されねばならない。逆に、「有機的」および「世襲的」とは、模倣とは異なる原理がそこに働いているということを意味することになる。このような対置を、われわれは、有機的会社と脳的社会という区別においてすでに見た。有機体としての性格を帯びたアリストクラシー的な枠組みは、類似化を生みながら拡大していくデモクラシー的で脳的な原理と衝突する。有機的社会は、いわば模倣の作用とは異なる論理の下に形成されたものである。デモクラシー化とは、したがってこの模倣外の「有機的」な論理が徐々に排除され、より「社会的」な論理が前面に出てくるという、質的変化の過程なのである。

タルドは、この過程で模倣が前提とする不平等が意味を変えたと述べていた。だが重要な
は、そこで単に前提が変わったというだけではないということである。それはむしろ、不平等
が何なのかを前提とするという図式そのものの変化を指し示している。この根本的な変化を、
タルドは一種矛盾した表現で述べているのである。模倣の流れが「世襲的」な不平等を前提と
するというのは、普通の意味をもった表現である。しかし、「社会的」な不平等が模倣の前提と
なるというのはそうではない。「社会的」なものは、タルドにおいては模倣のであり、模倣
が「社会的」な不平等を前提とするというのは、模倣が模倣を前提とする、ということになる
からである。この奇妙な論理が意味するところは結局、「デモクラシー社会」においては模倣が
その外部も何ら前提を持たないということである。ゆえに、模倣が前提とする不平等が意味を
変えた、という表現は実際のところ正確ではない。「デモクラシー社会」とは、あえて同語反復
的な表現を用いるならば、純粋に社会的な社会なのであり、そこででの不平等はそれゆえ、模倣
そのものによる不平等なのである。社会的ヒエラルキーは、こうして「デモクラシー社会」に
いて、その外部の論理に左右されない純粋な形で現れるものなのである。デモクラシーの概
念に「社会的」の語を結びつけることで、タルドが示していたのはこのような事実であった。
そして、それこそが、アリストクラシーや社会から「デモクラシー社会」への質的変化を示すも
のなのである 32。

たしかに模倣のヒエラルキーは、それが社会の普遍の原理であるがゆえに、あらゆる社会に
見られるものである。しかしながら、それはまさに「デモクラシー社会」において、世襲的枠
組みから、すなわち旧来の制度的ヒエラルキーから解放されることによって最も純粋な形で立
ち現われてくる。そうであるとすれば、模倣のヒエラルキーが存在するという事実それ自体は
普遍的であるとしても、模倣とヒエラルキーのあいだの因果関係は、アリストクラシー社会と
「デモクラシー社会」とではほぼ逆転していると言えよう。前者において、すでににある「世襲
的」な不平等あるいはヒエラルキーが模倣の流れを左右していたとすれば、後者においては、
模倣そのものによって形成されるヒエラルキーが問題になっている。それゆえ、模倣の特性そ
のものから発する社会的ヒエラルキーは、すくってデモクラシー的なものであると言うことができ
るのである。

しかしながら、純粋に「社会的」な、すなわち模倣のみから生み出される不平等は一体ど
のようなものであろうか。ここで、社会的ヒエラルキーが人間の精神の次元で形成されるもの
である、という点は重要である。タルドはこの点について明確に述べていた。
内部で、心の深いところで作用するという、人間的模倣が初めから帯びているこの性格、すなわちその核心においてある魂を別の魂へと結びつけるというこの特権的な性格は、これまでの点からわかるように、人々のあいだの不平等を増大させ、社会的ヒエラルキーを形成するものであった。

そもそも、タルドにとって模倣とは、行為や外見の模倣である以上に、信念と欲望という精神的なものの模倣なのであつ。もし行為や外見の外的模倣によってヒエラルキーが構成されるのであれば、信念あるいは欲望は、模倣の作用と関係なくすでにその個人のうちに構成されていることになるであろう。この場合、模倣は各々の個人の独立した精神的作用の結果となり、それゆえ個人の信念や欲望は、模倣の社会的作用に先立つということになる。もしそうであるならば、模倣によるヒエラルキーとは、模倣者が模範となる者の信念と欲望、あるいは判断と意志に従うという形で構成されるものとなろう。そのヒエラルキーにおいて、模範となる者は、模倣者の信念と欲望を断念させたり、その向きを変えたりするような主権を持つ存在となるであろう。だが、タルドが「社会的ヒエラルキー」という語によって指し示しているのは、そのようなものではない。タルドが指摘しているのは、模倣によって影響されるのは精神そのものの傾向であるということであり、それゆえ、この内部模倣による「社会的ヒエラルキー」は、あらかじめ構成された個人に外部から与えられるような枠組みではないのである。タルドは、人間そのものを模倣という事実から説明しようとしているのであり、その意味でヒエラルキーが存在するとは、人間がヒエラルキー的秩序に従うことを強制されないということではなく、精神の働きそのものがヒエラルキーを生み出すような社会の力学の中に組み込まれているということなのである。ヒエラルキーは、超越的な審観において、ある全体として人間を支配しているわけではない。それは精神の運動そのものなのである。

こうして、タルドが「デモクラシー社会」に見出したヒエラルキーの意味が明らかになってくる。タルドにとって「デモクラシー社会」とは、モナド化された「平等な」個人による社会ではなく、むしろ模倣の作用が最も活発化し、純粋なものとなる「社会的な社会」である。そして、そこに見出される運動こそがヒエラルキーと呼ばれたのであつ。それはアリストクラシー社会に見られるような制度的なヒエラルキーではなく、まさに人間の精神そのものの中で、
精神の傾向そのものとして働くような模倣の作用である。「デモクラシー社会」のヒエラルキーとは、結局、世襲的でヒエラルキー的な制度が後退し、人々の類似化が進むことによってその輪郭を明るみに出すような、純粋に精神的な運動であった。

3. 「社会的な社会」における優越性の生成

しかしながら、ダルクが「社会的ヒエラルキー」の概念を提示することで示していたのは、単に、「デモクラシー社会」において精神的かつ次元で社会的なものが作用しているということだけではない。言い換えれば、そのような社会的なもののが作用を示すだけであれば、必ずしもヒエラルキーの概念は必要ないのである。ここで改めて考えなければならないのは、この精神的な運動が、まさに「ヒエラルキー」と呼ばれていることの意味である。

この問題を扱う上で、セレスタン・ブグレによるタルド解釈を参照することは有益である。ブグレは、個人主義的哲学と、生まれつつあった社会学との調停という課題、すなわち近代的な個人の原理と社会の原理との調停という課題に取り組んでいた思想家であった34。そのブグレは、タルドが模倣の作用をヒエラルキーと呼んでいることは触れず、その思想を、むしろ近代的な個人の思想、すなわち平等の思想の側に位置づけている。彼は、デモクラシーの原理と模倣の原理の分節化を、ヒエラルキーの概念を通じてではなく、平等の概念をモナド的個人の属性とは別もののとして解釈することによって試みていたのである。

タルドについて論じる中で、ブグレは、模倣のもたらす類似化作用によって到来した「デモクラシー社会」が、必ずしも画一的な社会ではなく点を強調する。彼もまた「デモクラシー社会」において見出される模倣の社会的作用に注目しているのである。しかしながら、それがまさらすのはヒエラルキーではなく、「最終的な差異化」35と呼びうるものであるとブグレは言う36。重視の事は、ここでの「差異」が、もはや階級や人種のあいだの区別を意味するものではなく、個人の精神のあいだの差異であるという点である。それはむしろ個人を浮かび上がらせるものであって、ヒエラルキーとは対立するものであるとブグレはみなす。

実際、差異が個人の精神の問題となるというこの観点は、ある面でタルド自身の思想に正確に基づくものである。タルドはデモクラシーの進展の中で、模倣が多様化する点を指摘している。優越性が世襲によって受け継がれるアリストクラシー社会においては、その優越性は「人格そのものに内面的」37であり、模倣となる者はあらゆる点において模倣されていた。だが、「デ
モクラシー社会」においては、その全ての側面において優越性を偏えているとみなされる人物はもはや存在せず、人々は様々な他者のある側面のみを模倣するようになる。そして、「人々によって最もよく模倣される者も、その者自身が、ある面でその模倣者の中誰かを模倣することになるのである」38。それゆえ、模倣は全般化しながら、相互的で、ある側面に特化したもののとなるのである。こうして、模倣の流れは複雑化し、人々より多様な模倣の流れに晒されることになるが、まさにこの模倣の組み合わせが人間の多様性を生むのであり、それそれぞれの「個性（personnalités）」を開花させることになるのである 39。ブグレはこの点を、タルド論とは別の文脈において適切に指摘している。

慣習（coutume）の支配の下で、少数の個人をその全てにおいて模倣する時、われわれはその集団と一体となっており、われわれの個性は消失する。しかし、流行の支配の下で、われわれが多数の個人をそれぞれある部分において模倣する時、個性は再び姿を現わす。それ以後、われわれの類型を飲み込むような集合的類型はそこにはもはや存在しない。多様な模倣がある一つの地点において交差することで、すなわち、それぞれある一つの人格において出会うことで生じる組み合わせが反復される場合、というのはほとんどないのである。独自性は諸々の流行の交差そのものに由来する 40。

慣習と流行の区別に従いつつ、ブグレはここで、模倣の流れの多様化が個性の開花をもたらす理由を説明している。タルド自身、こうした観点から、模倣の進展した社会は「個人を解放することになる社会であり、「最も純粋で最も力強い個人主義とその到達点にまで達した社会性が同時に開花する」41社会であるとはっきりと述べている。この点を強調するならば、模倣の作用の中に見いだされる差異は、近代的個人を問いに付すようなヒエラルキーであるところ、モナド的個人の概念を修正することで、個人のより一層正確な定義を提示するものであるということにもならう。

ここからブグレは、タルドの思想がすぐれて個人主義的であるという結論、すなわち、模倣作用はむしろ個人の人格の独自性の開花を強調するものであるという結論に達するのである。たしかに、ブグレの言う個人主義は、デュモンの定義したそれとは異なる。ブグレにおいて「個人」とは、人類そのものを体現したモナドではなく、社会の中でそれがもつ個体性(individualité)
によって、すなわちそれぞれが差異を孕んだ人格として認められるもののことである。それは、いわば社会化されたものとしての個人である42。とはいえ、それが結びつけられるべきものはヒララテリーではなく、あくまで平等の方なのである43。タルドは、デモクラシー的不平等が「平等と呼ぶことのできる」44ものであると述べていたが、ブグレはこの点を重視しているとも言えるであろう。

だが、アリストクラシー社会から「デモクラシー社会」への変化および後者における模倣の精神的作用をかなり適切に捉えているこのようなタルド解釈には、やはり不十分な面がある。というのも、それはタルドにとっての一つの重要な課題、すなわち「デモクラシー社会」における優越性の生成の場を探るという課題を見逃しているからである。ブグレが、タルドの模倣作用を個性に、そしてそれゆえ平等に結びつけることで捉え損ねているのは、まさにそのようなデモクラシーの根底にある優越性の生成の運動である。そして、そこにこそタルドが精神の運動を「ヒララテリー」と呼ぶ理由があるのである。

優越性の生成をめぐる議論は、模倣の論理的影響を扱った『模倣の法則』第6章で展開されている。タルドが「社会的ヒララテリー」に言及していたのは、この中の「下層による上層の模倣（l'imitation du supérieur par l'inférieur）」について論じた節においてであった45。『模倣の法則』においてタルドは、「模倣の論理的法則（les lois logiques de l'imitation）」と模倣における「論理的影響（les influences extra-logiques）」を区別する。「論理的原因は、ある革新がある人物によってそれが他を比べてより有益であるか、あるいはより正しいと判断されるがゆえに選ばれる場合に作用するものである」46。模倣の論理的法則とは、模倣という社会的事実そのものが内在的なものとして持つ性質についての法則である。しかしながら、この論理的原因が単独で働くことは稀である。一般的には、模倣の作用には論理的影響が介在してくれる。それは、模倣そのものの論理とは別に、模倣の流れを決定するような諸要因である。そのような論理的影響も、論理がないといえば、ある法則性を持っている。そして、そのような法則として挙げられるものの一つが、下層による上層の模倣である。

この法則は、「上層の人物、階級あるいは場所に見られる模範は、下層の人物、階級あるいは場所に見られる模範にまさる」というものである。すなわち、それは上層と下層という社会的区分が模倣の流れに与える影響についての法則である。タルドは、例として貴族が王やその封主を模倣し、平民が今度は貴族を模倣する事象を挙げている。アリストクラシー社会におい
て容易に見出されるこの法則は、「デモクラシー社会」においても変わらず存在している。とはいえ、アリストクラシー社会において自明であった「社会的絵水塔」としての階級は、「デモクラシー社会」においてはもはや見当たらない。そうであるならば、それはどこに見出されるのか。ここで挙げられるのは、ジャーナリスト（publicistes）や財界人、あるいは官僚など、「デモクラシー社会」において新たに登場する優越者である。タルドは、このような優越者たちがいわば「新たなアリストクラシー」48をなしものであると言う。というのも、そこで発揮される優越性は、旧来のアリストクラシーにおける優越性に劣らず強力なものだからである。

状況によってもたらされた高慢さに由来するアリストクラシー（aristocratie de situations enorgueillissantes）は、簡素化されたり力を弱めたりするところか […]、まさにデモクラシー的な変容の効果によって、たえずより一層崇高なものとなる49。

この「デモクラシー社会」のアリストクラシー、とでも言うべきものは、それを賛美するものが多ければ多いほどその栄光が大きなものとなっていくものであり、矛盾した表現をあえて用いるならば、一種民衆的なアリストクラシーである。タルドによれば、ヴィクトル・ユゴーの礼賛は、拍手喝采によって強固なものとなっていくこのアリストクラシーの一例であった。「デモクラシー社会」におけるそのような優越者は、こうして、旧来のそれに劣らぬ作用を及ぼすものとして提えられる。タルドによってヒラルキーが強調されるのは、この「デモクラシー社会」を貫く精神の作用が、このような優越性の生起という意味での、一種のアリストクラシーを形成するからなのであり、タルドは、そこにこそ「デモクラシー社会」における社会的なものの作用の重要な発現を見ていたのである。ブグレによる一面では正確なタルド解釈が不十分であるとすれば、それは彼が、タルドがまさに「社会的なもの」の現象として捉えているこうした優越性の作用を見逃しているからなのである。モナド的個人の外部をタルドが「ヒラルキー」と呼んでいる事実に注目することで、われわれは、精神的な次元で作用する社会的なものの作用が、まさに優越性の生成の運動であるという点を見ることになるであろう。

もちろん、アリストクラシー社会から「デモクラシー社会」への移行の中で、アリストクラシーの場が単に移動したというわけではない。すでに見たように、その移行にはヒラルキーと模倣の関係の質的な変化が見られる。実際のところ、この質的変化を考慮するならば、ここ

---

14
で論じられている「下層による上層の模倣」の法則自体の位置づけが、問い直されなくてはならないであろう。本来、ここで掲われるべきものは模倣の論理外的影響、すなわち制度的な階級のヒエラルキーが模倣の流れに及ぼす影響である。実際、この法則はアリスクラシー社会の場合には当てはまる。しかし、模倣それ自体からヒエラルキーが生じるような「デモクラシー社会」が問題になった時、論理外的影響としてのその法則は厳密には存在しない。もしそこに「下層による上層の模倣」の法則がおさえられるとすれば、それは模倣の作用そのものが模倣としての上層と模倣者としての下層を生み出すという意味においてのみであって、その法則はむしろ、模倣の論理そのものなのである。そこで論じられるべきなのは、したがって、むしろ模倣によって優越性がどのように構成されるかという、正反対の問題であることだろう。

ここにおいて、「デモクラシー社会」のヒエラルキーという問題の本質が浮かび上がってくる。ヒエラルキーはそこで、まさに模倣の作用そのものとして、純粋に精神的なものとして構成される。しかしながら、そのようにして構成されるヒエラルキーの優越性は、旧来のヒエラルキーのそれと全く異なる性質のものであるというわけではない、変わらず一種の権力を行使している。そこに見出されるのは、調和的、安定的な状態としての平等と対置されることになるヒエラルキーの力学である。そして、タルドはここで、アリスクラシー社会においては容易に見出すことができたヒエラルキーの「真の権力」の場が「デモクラシー社会」においてどこに見出されるのか、という難問に直面することになるのである。アリスクラシー社会と同様、「デモクラシー社会」においても権力の作用は見出される。しかしながら、それはアリスクラシー社会の権力とは異なるメカニズムで生成される。ゆえに、ここで、水平的なデモクラシー的相関関係の流れから、模倣という社会的なものそのものによって、アリスクラシー社会の優越性に劣らぬ優越性が生じるという、それ自体逆説的なメカニズムが問題となってくるのである。言い換えれば、それは制度的なヒエラルキーが不在の「デモクラシー社会」において、人間の不安定な関係、あるいは関係という不安定性そのものに由来するものとして生成される優越性の力学の問題なのであった。

この問題は、「デモクラシー社会」のヒエラルキーが精神的な傾向として捉えられるだけに、一層複雑な問題である。すでに指摘したように、「デモクラシー社会」において権力が行使されているということが事実であるとしても、それは単に上位者が主権的権力をもっているという
ことを意味しない。実際タルドは、模倣によって生じる優越性の場を探求する中で、以下のように述べている。

結局、人々が模倣しようとするような優越性とは、人々が理解しうる優越性であるのII1。

ここで問題になっているのは、単に優越者の持つ力なのでではなく、模倣者の側から、すなわち下位の者からいう「理解」、という要素が入り込んでくる。したがって、考えなければならぬのは、単に誰が権力を保持しているかということではない。それはむしろ、権力の概念そのものであるのII2。ここでわれわれは、「デモクラシー社会」における社会的権力の問題に踏み込んだ。しかしながら、タルドのデモクラシー論において、権力はあらうこの社会的権力にめぐる議論については、また別の機会に譲らざるを得ない。ここではまず言えることは、タルドにおけるヒエラルキーの概念が、まさにこの社会的権力の存在を指し示すものであったという点である。

おわりに

結局、ヒエラルキーというタルドの概念は、モナド的な個人の平等という表象の背後に存在し、精神的な次元で働く社会的なもの力学を指し示すものであった。それは、独立し、互いに切り離された個人による社会という観念を示し直すものと同時に、社会的なものの中での個性の調和的な開花という観念も示し直す。ヒエラルキーとは、モナド的な個人による調和でも、社会的なものので調和でもない。それぞれの概念によって指し示されているのは、旧来の封建的諸制度が崩壊し、諸条件の平等が一定の程度実現した「デモクラシー社会」の中で、精神的なものとして働く、不安定な権力のメカニズムなのである。

とはいえ本論は、タルドのヒエラルキー概念が、「デモクラシー社会」をどのような形で現れ直したのか、彼が「デモクラシー社会」の社会的なものをどのようにしたものとして捉えていたのか、という点に注目することで、タルド思想のある側面の輪郭を描き出したにすぎない。そこからはむしろ、これから論じるべき問題としての社会的権力の問題が浮かび上がってくる。そして、この課題に答えるためには、優越性の生成を実現に権力の問題として捉えている『権力の変容』の著作を分析し、社会的権力の概念について明かにすることが必要となる。
ヒエラルキーを権力の問題へと結びつけるこのような作業を通じてこそ、タルドにおける社会的ヒエラルキーの持つ意味も、そしてそれが19世紀フランスの政治・社会思想の中で持つ意味もより一層明らかとなるであろう。

---

2. 「デモクラシー社会 (société démocratique)」という表現は、例えば、「デモクラシーを「社会状態 (état social)」として捉えるトクヴィルの、『アメリカのデモクラシー』第二巻において頻繁に見出される。なお、「デモクラシー」が社会のあり方を指す語として用いられるようになったのは、七月王政期においてである。Cf. 田中拓道,『貧困と共和國』, 人文書院, 2006年, p. 67-68.
念を問い直すものである点については別の機会に論じた。 Cf. 論辺「〈民主的人間〉と専制ーボクスの思想における〈社会的なもの〉をぐぐって～」『年報 地域文化研究』第 14 号、2010 年）。

10 Tarde, Gabriel, Les Lois de l'imitation, Paris, Félix Alcan, 1911[1890], p. 12. 邦訳『模倣の法則』、池田祥英・村澤真保呂訳、河出書房新社、2007 年、p. 40。引用は、基本的に原文から新たに訳出し、適宜邦訳を参照した。以下では、この『模倣の法則』からの出典を LI と表記し、原典のページ番号の後に括弧書きで邦訳の該当箇所のページ番号を付すことにする。

11 LI, p. VIII. (p. 12.)

12 Ibid.


14 LI, p. 95. (p. 139.)

15 「あらゆる発明およびあらゆる発見は、それゆえ、それ以前の模倣を要素として持つような複合体である」（LI, p. 48. [p. 84.]）。

16 「個人は知らず知らずのうちに革新をなすものであり、実際のところ、最も模倣的である人間がある面では革新者となるのである」（LI, p. IX. [p. 13.]）。もっとも、このことは発明の機会が重要でないということを何ら意味しない、という点は強調しておくべきではない。 Cf. 中倉智徳, 『ガブリエル・タルド』、洛北出版、2011 年、p. 69-70.


18 LI, p. 3. (p. 30.)

19 LI, p. 240. (p. 306.) 強調原文。

20 LI, p. 244. (p. 310.) 強調原文。

21 LI, p. 399. (p. 481-482.)

22 LI, p. 395. (p. 478.)

23 LI, p. 417. (p. 500.)


25 セレスタン・ブグレは、この点を指摘している。「それゆえ、模倣の哲学は、トクヴィルがその根本的な原因を見すことなく、宗教的畏怖から詫嘆したデモクラシーへの不可逆の歩みを明るみに出すものである」(Bouglé, Célestin, « Un sociologue individualiste, Gabriel Tarde », in La Revue de France, 1905, mai-juin, p. 312.)。

26 こうした議論は、社会の発展を有機体のモデルで捉えるルネ・ヴァルムスらへの批判である。 Cf. Tarde, Gabriel, La Logique sociale, Paris, Félix Alcan, 1913 [1893], p. 133.

27 Ibid., p. 130-131. 強調引用者。
アリストクラシー社会から「デモクラシー社会」への質的変化と、「デモクラシー社会」におけるヒエラルキーの可能性を指摘する際、タルドはトクヴィルを参照している。トクヴィルは、平等主義的社會への傾向が不可避のものであると言った。しかしながら、社会が絶えず類似化へと向かうとしても、そこから、絶えず平等化が進むという結論は得られない、とタルドは言う。「というのも、模倣による類似化は社会がそこから作られるような生地にすぎないからである。この生地は、社会論理によって裁き切られ、形をとるものなのであり、その社会論理は、むしろ諸々の能力の特殊化やそれらの相互的協力、諸々の知性の特殊化やその相互的承認によって社会をより強固に統一することを目指す」。それゆえ、「完成され、最終的な発展にたどり着いたあらゆる文明が、同じ権力と同じ富を言わないまでも、少なくとも同じ欲求と同じ観念をその市民全体に行き渡らせた状態によって測られるとしても、非常に強いヒエラルキーが、ある文明の最終地点であるということはありうることであり、蓋然的なことでするから」。タルドはこうして、「デモクラシー社会」におけるヒエラルキーの生成の可能性を、トクヴィルを批判しながら主張する。しかしながら、「トクヴィルに譲歩することができる点は、ある国において血統の世襲的威信によってかたち立てられたアリストクラシーが一度破壊されれば、それは二度と生まれないということである。それゆえ、「世襲的」な社会から「社会的」社会への変化は不可避なのである。タルドにとって、アリストクラシー社会から「デモクラシー社会」への移行の本質をなすのは、まさに「世襲的」とヒエラルキーから「社会的」ヒエラルキーへの移行という点である。そして、その点において、タルドの立場はトクヴィルの立場と重なることになる。Cf. Li, p. 419. (p. 501-502.)

33 Li, p. 232. (p. 299.) 強調引用者。


37 Li, p. 252. (p. 317.)

38 Ibid.

39 Li, p. XX. (p. 24.)


41 Li, p. XX. (p. 24.)

42 このような議論を展開するにあたってブグレが依拠しているのは、まさに個人的人格と社会的連帯の関
係および分節化を扱ったデュルケムの『社会分業論』である（実際、ブグレがデュルケムを参照している箇所については、例えば、Cf. Bouglé, Célestin, Les Idées égalitaires, op. cit., p. 211.）。したがって、このような議論に基づくタルド説解は、ある意味でデュルケム的観点からのタルド理解、あるいはデュルケム的観点とタルド的観点を調和させる試みとして捉えることができるであろう。

43 ブグレは、ここでもデュルケムの社会分業論を踏まえながら、個人の差異化によって、互いに互いを必要とするようになった状況を、平等として捉えている。Cf. Ibid.

44 LI, p. 397. (p. 479.) Cf. 本論注 30.

45 Cf. 本論注 20.

46 LI, p. 153. (p. 209.)

47 LI, p. 210-211. (p. 275.)

48 LI, p. 248. (p. 313.)

49 LI, p. 245. (p. 310-311.)

50 LI, p. 235. (p. 302.)

51 LI, p. 253. (p. 318.)


La hiérarchie à l’âge d’égalité
Sur la pensée de la société démocratique chez Gabriel Tarde

AKABA Yu

L’égalité est le principe constitutif d’une société démocratique. Néanmoins, ce fondement démocratique n’est pas nécessairement cohérent avec le principe organisateur de la société. D’où apparaît une question. Comment s’articulent les deux faits qui se présentent dans le syntagme « société démocratique »: la société et la démocratie ? C’est précisément à cette question que Gabriel Tarde s’affronte en parlant de la hiérarchie qui est un élément organisateur réel de la société. De ce point de vue, notre étude a pour but d’ expliciter la notion de hiérarchie chez Tarde et la façon dont elle remet en cause la société démocratique.

D’abord, nous clarifions le fait que la hiérarchie chez Tarde est incompatible avec l’idée de l’individu monadique. Sous la représentation des individus égaux l’un à l’autre sans aucune interaction se cache la dynamique de la relation humaine irréductible à cette représentation. Et c’est cette dynamique que le concept tardien de l’imitation, ainsi que la hiérarchie qui en résulte, permettent de saisir.

Nous examinons ensuite quel type de hiérarchie Tarde envisage, en même temps qu’il perçoit l’avènement d’une nouvelle ère égalitaire. Il définit une hiérarchie purement spirituelle, qui s’y déploie d’autant plus que la société est libérée des entraves des institutions héréditaires. La hiérarchie consiste dès lors en une tendance sociale de l’esprit.

Enfin, nous repensons la raison pour laquelle Tarde appelle « hiérarchie » cette tendance. Pour Tarde, il ne s’agit pas simplement d’indiquer l’existence de la dynamique sociale de l’esprit dans la société démocratique, mais de révéler le devenir des supériorités. En fin de compte, Tarde entend par hiérarchie la dynamique du pouvoir qui dérive exactement de l’instabilité des relations humaines elle-même.

Ainsi Tarde explique-t-il au travers du concept de hiérarchie la société démocratique, qui ne se réduit ni à une forme d’individualisme, ni à la présence harmonieuse du social, mais qui provient de la dynamique du pouvoir social.